

屈伸する力

審査委員長 中西進（田辺聖子文学館館長
高志の国文学館館長）

すこし前のことになるが、ある小学校でこんな経験をした。

学校に到着すると、こどもたちはすでに講堂に集められており、なかば騒然とした集団として隣り同士、おしゃべりに熱中していた。

ところが校長先生に導かれてわたしたちが講堂に姿を現わすと、ピタリと会話をやめ静まり返った。そして校長先生の「背筋を伸ばして！」という一声でいっせいに肅然とした一団となり、ドミノの駒のごとく前後左右鑄形にはめたように整然とした隊列になった。

このまま歩調をとって歩き出せば、それはみごとに軍隊の行進となっただろう。しかしその瞬間、わたしは大きく落胆した。

ああ、これを崩さなければ話はわかってもうえないナと。

話などというものは、自由自在、自分独特の受け皿に応じて受けとってもらえるのであって、全員が共通して持っている公定の受け皿には、はなはだ不向きなものなのだ。

十人の訴えを同時に聴いたという聖徳太子は、大きく開かれた受け皿の用意が、上手だったのだろう。

反対に、じつと頬に手をあててうつ向いておいでの広隆寺の弥勒様は、切々と訴える一つの事柄をじっくりと聞きとって、慈愛の手をさしのべられたはずだ。

こんな受容する態度の多様さは、一つの事柄についても同じだ。一般の事として受けとることと、深く吟味してじっくりと熟考した上で受けとることと、さまざまであってこそ、慈悲のお力は大きいに違いない。

良質な物を受けとる態度はまっ直ぐに背筋をのばして聞く場合もあれば、背を丸めて深く事柄を内向させながら考える場合もある。

この心の力の屈伸。それを通して素材を受容した時に、人間は心の滋養を大きく摂取し、さらに同じように屈伸する力でそれを吐き出せば、すばらしい発言ができる。

この力の所有者を若者とよぶのだと、わたしは思う。